

●平成 31 年度一般入試後期日程学力試験講評

問 1

“an illusion”が何を指しているのかを説明する問題。直後の that は同格を示す用法（名詞+S V「S が~するという〇〇」）なので、that 以下の内容をまとめるとよい。正答率は 6, 7 割ほどで、満点解答は少なかった。thus は「それゆえに」の意だが、それを読み取れずに and の前後の因果関係を訳出できていない解答が散見された。

問 2 (1)

下線部②は「過去のものになった」の意。何が「過去のもの」なのかを答える問題なので、この文の主節の主語である“A vision to seek a world without nuclear weapons”の内容を説明すればよい。正答率は 8 割程度だった。オバマに関する記述はあくまで関係詞節の中の、主節を補足する内容なので、この部分を中心に据えた答案に対しては大幅に減点した。

問 2 (2)

下線部②の理由を答える問題。正答率は 6 割ほどであったが、満点解答はほとんどなかった。解答に該当するのは下線部直後の第 4 段第 2 文の内容であるが、nuclear weapons states 「核保有国」、existing ones=existing nuclear weapons 「現存する核兵器」を正しく説明できていない解答が非常に多かった。

問 3 (1)

下線部③の中の、identity の意味を詳しく答える問題。正答率は 7, 8 割ほどであった。identity crisis の具体的説明を答える問題だと勘違いして、今日の核兵器をめぐる日本の状況を説明している部分を抜き出している解答があったが、これは完全な誤答。日本が世界唯一の核兵器被ばく国であることを述べている第 5 段第 1 文の内容を抜き出せばよい。

問 3 (2)

この問題では「唯一の被爆国であるにもかかわらず」「日本政府が核兵器廃絶に積極的に取り組んでいない」という矛盾する 2 つの要素に言及する必要があるが、どちらか一方だけを記述した解答が多く見られた。

問 4

問題文に「“a big gap”の内容を 2 つの立場を明らかにし」説明するよう指示があるので、2 つの立場（誰が・どうしているのか）の違いを対比させるような形で説明する必要がある。「誰が」に関しては「被爆地である広島・長崎の住民」と「日本政府」が対比され、「どうしている

のか」に関しては、前者が「核廃絶を強く望んでいる」のに対し、後者は「核廃絶に積極的な姿勢を示していない」という違いを明確にすることが求められる。

問5 (1)

この和訳問題は3つのパートに分けられる。まず主語の“Some people abroad”は「何人かの人がいる」では不十分で、「～という人も海外には存在する」という風に“abroad”をきちんと訳に反映させることが大切である。次に述部にあたる“suspect that”は「疑いをもっている」と訳すべきだが、この部分の訳がきちんと出来ていない解答が比較的多く見られた。That 節以下の内容文は“Japan has a **hidden intention** to develop **nuclear arms** in the future”は「日本は将来核兵器を開発しようとする隠された意図を持っている(のではないか)」と訳されるべきだが、下線部分の単語を「秘密の施設、秘密の能力」や「原子力の腕」などと誤訳している例がいくつか見られた。これらの単語は一般常識としてぜひ押さえてほしいレベルである。

問5 (2)

問題文に「**英語で説明しなさい**」と指示があるにもかかわらず、日本語で解答したため減点対象となったケースが多く見られた。該当する英文は、下線部⑤と同じ段落の最初の2文で、“Japan possesses a large amount of plutonium enough to make lots of atomic bombs.”と要約することができる。

問6

問6は(1)と(2)の問いがある。(1)は問題文の筆者の考えを説明するものであり、(2)は「あなたの考え」を問う問題である。

問6(1)は「筆者がICANを(真の)グローバル人材の例として適切であると判断している理由」を説明する問題である。問題が求めているのは「なぜそのように言えるかを説明」することなので、論理的に説明がなされていなければならない。しかし、この問題自体を十分に理解できておらず、問題に答えられていない解答が散見された。

この問題における中心的な要素は、「真なるグローバル人材」である。つまり、解答者の主観的な判断や個人的な考えを述べるものではない。それに関わらず、「わたしの思うグローバル人材とは…」や文中のICANの活動をただ列記し、「これは智恵と勇気があるのでICANは真なるグローバル人材だと思う」といった解答が散見された。また、「ICANがいかに智恵と勇気があるか」を説明した解答が多かった。問題文を把握し、ICANの活動がいかにそれに沿ったものであるかを、問題文をもとに記述して欲しかった。

問6(2)については、自分の考えを、ロジカルに、かつ説得力を持って表現できるかをひとつの評価としている。しかし、「文章の構成」を意識し、記述されている解答が多くはなかった。特に気になったことは、以下である。

- ・答えなければいけない要素を整理して把握し、対応的に回答できていない。

- ・要素の構成を組み直し、全体としてまとまりのある文章を作成できていない。
- ・文章を構成するための段落がない。

この問題では3つの質問に答える必要がある。記述されている順番で言えば、A)今後なにを学び、B)どのような世界的な難題に、C)どのように取り組むか、の3つである。

まず、それぞれの質問にしっかりと対応して回答できている解答が少なかった。自分の思うグローバル人材の説明とそれになるにはどうしたらいいと思うか、といったことがただ書かれているものなどもあり、問題がどのようなことを問われているのか、何に答えなければいけないのかを整理して理解できていないと推察される。それぞれの質問を明らかにし、それにどう答えるかを考えて欲しかった。

内容に関しても本学を受験することを意識していない答案が散見された。本学への入学を志望するのであれば、本学での学びや取り組みと関連することが述べられることを期待したが、本学と無関係なことを述べる答案が少なからずあった。本学と無関係な学びと取り組みについて述べても、それは現実味を欠く「作文」にしか読めない。本学について多少なりとも理解して受験していれば、このような「作文」にはならないはずである。

全体としての構成についてもコメントしておきたい。この問題においては、文章の構成が、問題文の順序通りになっているものが多く見られた。つまり、学び、問題、取り組み、の順である。しかし、各要素間の繋がりがなく、もしくは非常に希薄な解答が多かった。ひとつの文章としての、主張として成立しておらず、バラバラの状態であったと言える。要素を整理して把握したら、解答を考え、再構成して欲しい。どう書けば、自分の主張が読み手に伝わるのか。試験という限られた時間ではあるが、そこを考え、解答を作成してもらいたい。

最後に、基準の文字数より著しく少ない或いはかなりオーバーしている解答、誤字・脱字がある解答は減点の対象とした。受験生の皆さんには日頃からテーマを決めて文章を書く練習をするなど対策をして試験にのぞんでもらいたい。